

正慶二年（一三三三年）五月二十一日、鎌倉幕府十四代執権であった得宗の北条高時が天皇方の坂東武者新田義貞らとの鎌倉攻防戦に敗れ、東勝寺で自刃した。従う北条家恩顧の御家人数百人も得宗の後を追ひ鎌倉幕府は名実ともに滅亡した。

建武二年、中先代の乱（一三三五年、高時の遺子時行が、北条氏の再興をめざし建武新政府に背いた兵乱）の討伐に東下した足利尊氏が、新田義貞誅伐を奉上して叛乱に転じ、建武三年（一三三六年）正月京都に入った。

大江田氏経は十九才の若武者であったが、脇屋義助（新田義貞の弟）の配下として天皇方につき、箱根をはじめ各地で謀叛した足利尊氏の軍勢と戦った。建武三年二月十日から二月十一日の二日間にわたる撰津打出・西宮浜・豊島河原の戦で天皇方の北畠顕家に敗れた足利尊氏は翌二月十二日夜陰に乗じて兵庫の港から海路九州へ逃げた。大江田氏経は新田義貞軍の先鋒隊として陸路、取り残された足利尊氏軍を攻めたて、備前船坂（三石）まで追ひ詰め大勝した。

「長船村の垂光を呼んでくれ」

兵達に食事をとらせた後、大勝に機嫌を良くした大江田氏経は言った。京都を発つとき集めた兵糧運搬の人足達のなかに備前長船村へ帰りたいという刀鍛冶がいることを思い出したのである。

「お呼びでございますか」

と烏帽子を被り筒袖を着て括り袴に脚半を巻いた旅支度の若い男が畏まった。

「備前長船はここからいくらもないであろう。お主はこれから師匠の許へ帰るところであつたな」

「はい。左様でございます。京からの道中お蔭様を持ちまして恙なくここまで帰ってくる事が出来ました。これも一重に大江田様の軍勢の中に加えて頂けたお蔭でございます。どうぞありがとうございますと言いました」

と垂光と呼ばれた若い男が言った。

「お主と知り合つたのもなにかの縁。お主の鍛えた刀が欲しい。長船へ帰ったら一振り鍛えては呉れまいか」

「有り難いことでございます。垂光帰省後の初仕事でございます。心魂込めて鍛えさせていただきます」

「我等は備中福山城を必ず攻め落とすから出来あがったら、福山城へ届けて呉れ」

「はい。福山城は私が幼い頃修業したところのあるお寺でございますのでお易い御用でございます」

「そうか。それはまた奇縁じゃのう」

三石城に入って兵の疲れを癒したのち、大江田氏経は勢いに乗って更に進軍して備中の豪族莊常陸兼祐が拠る備中福山城を窺っていた。

延元元年、建武三年三月（一三三六年）梅の花がそちこちに咲きはじめた頃、都から遠く離れたここ備中の国山手村にも、鎌倉幕府滅亡と建武の新政混乱の噂はいつとはなしに広まり、福山城で戦が始まるうとしている気配に民百姓は末世が近付いたと恐れおののいていた。十日毎に開かれる市に集まってきた人々は、物を購うこともさりながら、近くまた戦が始まるのかどうかを確かめたがっていた。

「鎌倉では、北条高時様が自刃なされ、御家来衆も何百人と切腹されたそうじゃ」

「おお、怖しやのう。南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏」

「都では火付け、強盗がぎょうさん出て、都大路は死人で埋もれているそうじゃ」

「あな、おそろしや。末法じゃ。南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏」

「幕府は御醍醐帝を隠岐へ島流しにしんさつたんでその罰があたって滅んだのじゃろうよ」

「まこと罰当たりなことよ。尊氏も帝に弓引いて、罰が当たり帝との戦に負けて九州まで逃げたそうな」

「その尊氏が九州から攻め上がってくるそうじゃ」

「それもそうじゃが、お館様が福山寺に砦を築いて戦の準備を始められたそうじゃ」

「お館様は天皇方と足利方とどちらにお味方なさるのじゃろうかのう」

「幸山城のお館様の所へは天皇方からの使者が来たそうな」

「天皇方の軍勢は船坂山を越えてこちらへ向かって来ているらしいぞ」

「莊氏は源氏の系統じゃから足利に加勢しますらあ。見ててごらんせえ」



ねえ名前じゃったかのう忘れてしもうたが」

と前歯の欠けた中年の男が続けた。

「栄西禅師じゃろうが」

杖をついた老人が言う

「そりゃあ間違うとりますがなあ。栄西禅師はお茶を広められた坊さんでわしら、百姓には縁もゆかりもない偉いお上人様じゃ。南無阿弥陀仏を説かれたのは、法然上人じゃ。法然上人はのう、わしら百姓にも阿弥陀様の功德が授かるようにと修業されて南無阿弥陀仏というお題目を教えてくださいださったのじゃ。法然上人は美作の国から出られたのじゃ」とその隣の老婆がしたり顔でまがった腰を手でさすりながら言った。

「何とまあ、物知りのおばじゃのう。山手村の語り部じゃが」

と若い壺売りが感心しながら言った。

「皆の衆、ようお聞きんせえ。法然上人も確かに偉いお坊様で、隣国の美作のお生まれじゃからお前様がたが信仰なさるのもようわかる。じゃがのう、南阿弥陀仏では救われないのじゃ。末世をお救いんさるのは南無妙法蓮華経しかないのじゃ」

と蛇を首に巻いた若者が確信に満ちた声で言った。

「お前さん、先程から南無妙法蓮華経としきりに唱えとりんさるが、そのお題目はどこで聞いてこられたんじゃ」

と前歯の欠けた中年の男が言った。

「都じゃ。鎌倉に日蓮という偉いお上人様があられてな、南無妙法蓮華経を始められたのじゃ。これは有り難いお題目ぞな。お前らも聞いておられようがのう。昔、文永の役とってな蒙古の大軍が九州へ攻め寄せてきたじゃろうが。そうよな、もう六十年も昔のことになるかのう。この蒙古の来襲を日蓮上人は六年も前に予言されたのじゃ」

「ほほう。蒙古襲来のこととはわしも爺さまから餓鬼の頃聞かされて知つとるぞ。じゃがなあ、お前さん日蓮上人が六十年も七十年前に唱えられたのなら、日蓮上人さまは何才になれるのじゃ。たいそうなお歳よなあ」

「もし生きとられりゃあ百歳を越えとられましようぜえ」

「それじゃあ、日蓮上人様はもうお亡くなりなさったんかいのう」

「そうじゃ」

「では、お前さんは誰に教わりんさったんじゃ」

「わしが、南無妙法蓮華経のお題目を教えて戴いたのは日実上人といってな、日蓮上人のひ孫弟子に当たるお坊様じゃ。日蓮上人はもう五十年前にお亡くなりになっていますらあ。日蓮上人には高弟が沢山おられてのう、日像というお上人様が都へ初めて南無妙法蓮華経を伝えられたのじゃ。この日像上人の一番弟子が大覚上人でそのまた高弟が日実上人様なのじゃ。わしゃあこの日実上人から南無妙法蓮華経を教わったのじゃ」

「日実上人は日蓮上人のひ孫弟子にあたられるというわけじゃな」

「そうじゃ。日実上人様は今、備中野山の妙本寺へ来ておられますがな」

「わしらにも教えてつかあさるじやろうかのう」

「教えてつかあさりますらあ。教えてもらいたかったら先ず、南無妙法蓮華経を唱えられえ。このお題目だけが仏法の神髄じゃ。南無妙法蓮華経を唱えてさえいれば、貴賤、老若、男女の差別なく善人も悪人も、成仏出来るのじゃ。難しいお経もいらんの

じゃ。修養もいらんのじゃ。この世の災難も避けられるのじゃ。あの世でも成仏できるのじゃ。南無妙法蓮華経を唱えんせえ」

「戦が始まるうとしているときに南無妙法蓮華経はわしらを救ってくださいさるんじやろうか」

「そこが南無妙法蓮華経のよいところじゃ。必ず救ってつかあさるんじや。末法の世だからこそ、お釈迦様の正しい教えである法華経を広めなきゃあおえんのじゃ。法華経がこの世の隅々までいきわたれば、この世が仏の浄土であることがはっきりするんじや」

京都から戦火を逃れてきた備前の国の刀鍛冶の中に日蓮上人の法華宗に帰依しているものがあり、「南無妙法蓮華経」のお題目さえ唱えていれば貴賤、男女、善悪人等の差別なく一切衆生は成仏できると説いて廻っていた。この教えは他宗を認めず攻撃するところ甚だしいものがあるが、悪代官の厳しい取り立てに喘ぎ、飢餓寸前の百姓達には強烈な説得力をもっていた。この刀鍛冶の名を備前長船村の垂光という。垂光は備中山手の領主莊左衛門次郎が端女に生ませた庶子である。母は彼の生後間もなく